

酒井 淳 氏へ「贈賞にあたって」

堤 剛

私が最初に酒井さんに出会ったのは彼がまだ可愛い坊やの頃で、名古屋にあった「スタジオ・ルンデ」での私のリサイタルの時でした。其の時既にチェロを始めておられ、お母様に連れて来られたのです。私がプログラムにサインをしている写真が今でも残っています。

その次に会ったのはカナダの西海岸にあるヴィクトリアという町で催されていた夏の講習会で、チェロの巨匠ハーヴィー・シャピロ教授のクラスに参加されていました。其の頃からチェロと本格的に取り組んでおられ、シャピロ教授も「アツシは大した才能の持ち主だ!」と感心されておられたのを覚えています。

数年後フランスのパリに留学され私の友人でもある高等音楽院のフィリップ・ミュレル教授に師事、チェリストとしての地位を不動にされました。

彼の地でピリオド・インストゥルメントに興味を持たれ、この方面でも多数の方から尊敬される存在となり、今やモダンチェロ/バロックチェロ/ヴィオラ・ダ・ガンバの三種の楽器で大活躍しておられます。

どの楽器を使用しての演奏も勿論素晴らしいのですが、酒井さんは学究肌のな面も持っておられ、彼が私共「日本チェロ協会」の会報に寄せられた一文はとても立派で解り易く、深い内容を持ったもので皆大いに感心させられました。

その後桐朋学園大学の特任教授のポジションも引き受けて下さり、教育者としても貴重な存在だ、という事を立証されました。校内でクラスの一つを拝聴させて頂いた時はバロックダンスについて講義されていましたが、実際に種々のダンスを学生の前で披露される事によって学生達の理解度がグーンと深まり、生きたものになりました。

酒井さんの幅広い活躍ぶりは経歴書などの通りですが、私はその国際的な幅広い活動によって日本のチェロ界のみならず音楽界全体に大きな刺激を与え、ピリオド奏法等がより身近なものになり、歴史が如何に現在と結びついたものであるかを私達に改めて実感させて下さいました。静かではありますが力強いリーダーシップを発揮されていると言って良いと思います。

今回選考委員の先生方の強い推薦を得られて「齋藤秀雄メモリアル基金賞」の受賞者に選ばれましたが真に相応しく、私達皆とても嬉しく思うと同時に今後のますますの活躍を期待致しております。

第15回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

「受賞の言葉」

酒井 淳

この度「齋藤秀雄メモリアル基金賞」を私にと、ソニー音楽財団様からご連絡を頂いた時は正直、驚きと喜びの気持ちが混じり溢れて隠せない心境だったのですが、日が経つにつれ、齋藤秀雄さんの名のある賞を、チェリストまたは教鞭をとる者として受けさせて頂く、責任の重大さをつくづく実感し始め、本当に恐縮しております。

最近、1933年に齋藤秀雄さんがチェリストとして録音したスッペの「詩人と農夫」序曲の録音を聴く機会がありました。素朴な音色で奏でる内には、崇高な精神性と哲学的な教養が一貫として裏付けられていて、氏の魂のあり方に深く感動いたしました。また以前、ヴィヴァルディの「四季」を指揮なさっている映像を観たこともありますが、厳しく綿密な音楽作りの姿勢からは「信念があれば山をも動かす」という聖書の言葉をまさに実行なさっていた人の姿があり、大変輝いてみえました。

教育者としての齋藤秀雄さんの偉大なる功績を私から言及する必要などないのですが、子供たちに、時の経つのを忘れるほど音楽の基礎を辛抱強く、かつ優しい眼差しで教えている姿を見て、明確なビジョンを常に持ちながらコツコツと絶え間なく積み上げた努力の結晶が結ばれる過程というものはこういうものなのだと思います、氏の使命感溢れる生き方に感銘を受けました。

私もいやはや、後進の指導にあたる側の身になってしまいました。桐朋学園で教え始めた時にまず、廊下で一生懸命練習していたり、純粹で素直に素朴な質問をしてくる生徒さんたちに出会い、「ああ、なんて良い学校なんだろう」と思いました。その反面、自発的に表現をしたくなる創造性や、「型には入れ」ても「型から出よ」うとする意欲が大半の学生たちに欠けているのを感じ、真の芸術家を育てる難しさを、肌で感じる今日この頃です。

現代社会は世界中において、自国の利益をまず優先する閉鎖的な思想が広まりつつあります。そのような中でも音楽は、空や海のように広大な心で、人と人との繋がりを常に願っています。今こそ、この世界に生きる喜びや悲しみをお互いに分かち合えるメッセージを音楽家として発信しなければなりません。

この度は受賞させていただくことになり、身の引き締まる思いでいっぱいです。

最後になってしまいましたが、今まで見守り支えて頂いた先生方、マネジメントの方々、素晴らしい仲間たちと家族に心より感謝申し上げます。